

子どもにとって見えづらい立場や視点を取り上げる論争問題学習 - 第3学年「こども図書館のこれからを考えよう」を通して-

野元 祥太郎

1 はじめに

社会科部では、「社会の仕組み・社会への関わり方を問い続ける子どもを育成する社会科授業づくり」を主題に掲げ、「〈他者〉を楽しみ続ける子どもの育成」にアプローチしている。社会問題やその解決策、また自分の関わり方について安易に思考してしまう子どもの姿を問題視した。そのような子どもの姿を生み出してしまうのは他でもない社会科授業やカリキュラムのあり方である。特に「①正解を求めさせてしまう授業・カリキュラム」「②一つの答えをもって閉じる授業・カリキュラム」「③聞きやすい（受け入れやすい）・見えやすい・解決の見通しが立ちやすい立場・視点を取り上げた授業・カリキュラム」の3点にこれまでの課題を見出した。そして、その課題を乗り越えるためには、自分たちの意思決定に対する批判的・省察的な思考場面を位置づけることが重要だと考え、実践に取り組んできた。本稿では、特に③の課題に着目し、子どもにとって見えづらい立場や視点を取り上げる論争問題学習を取り入れた社会科授業について述べる。

2 論争問題学習において子どもにとって見えづらい立場や視点を取り上げる意義

(1) 論争問題学習を取り上げる意義

本校社会科部では、令和4年度、論争問題学習を取り入れた社会科授業開発に取り組んだ。論争問題とは、金（2022）によると「普遍的な答えが存在しない2つ以上の見解が衝突する問題」のことである。その論争問題を取り上げる意義は次の2点にあると考える。第一に、教材の〈他者〉性が高まることである。論争問題にはほとんどの場合複数のステークホルダーが存在するため、論争問題という〈他者〉の中に、立場Aという〈他者〉、立場Bという〈他者〉といったさらなる〈他者〉が生じる。そのため、「分かるようで分からない」「～だけど～じゃない」と、自分たちの意思決定を見直したり、比べたりする必要性を生じさせると考えた。第二に、教室の〈他者〉性が高まることである。論争問題では先に述べたように多様なステークホルダーが生じたり、多様な視点で意見が形成されていたりするため、教室にいる学習者も多様な意見を形成する。そのような自分とは異なる意見をもつ友達が、教室の〈他者〉とし

て立ち上がってくるため「Aさんの意見との違いはなんだろう」「どうして意見が異なるのか」とやはり自分の意思決定を見直したり比べたりする必要性が生じると考えた。



図1 「論争問題と〈他者〉性の高まり」イメージ

このように、論争問題学習を取り上げることで、自分たちの意思決定に対する批判的・省察的な思考を促すことができると考えた。

(2) 子どもにとって見えづらい立場や視点を
取り上げる意義

なぜ、子どもは自己の認識を見直すことをしないのか。これまでの社会科授業において、子どもたちにとって「受け入れやすい」「目に見えやすい」「解決の見通しが立ちやすい」立場ばかりを取り上げてしまっていたことを問題視した。

子どもたちが向かっていこうとする〈他者〉であっても、それはあくまで子どもにとって受け入れやすい範囲であるため、自己の認識を見直す必要性を無くしてしまっていた、ということである。このことに関わって、障害学を研究する飯野・星加・西倉（2022）は、次のように述べる。



図2 「子どもにとって見えづらい立場を取り上げる」イメージ

いまわたしたちが暮らしているこの社会は偏っている。その偏りは、この社会がマジョリティに合わせて創られていることによって生じているのであり、マイノリティが経験する不利や不便さ、生きづらさの要因になっている。(中略)

社会の中に存在するこうした偏りは、ある問題を「個人的／社会的に」に扱うかどうかの決定に大きな影響を与えている。なぜなら、マジョリティに合わせて作られている社会では、何が「個人的／社会的」なのかを定義する権力はマジョリティの側に付与されているからである。もちろん、マジョリティ側は、自分がそうした特権を持っているという事実が無頓着であることができるし、むしろ自分は「公正」で「公平」な人間だと信じている。

そこで、(1) 論争問題学習を取り入れるにあたって、さらに「子どもにとって見え

づらい立場や視点」「主だった説明から排除されてしまっている立場や視点」を取り上げることに取り組んだ。図 2 は、それらを示したものである。右下の灰色部分のように、子どもから見えづらい立場を取り上げることで、論争問題という教材の〈他者〉性が高まり、自分の意思決定を見直したり問い直したりすることが可能だと考えた。

3 授業構想

(1) 単元「こども図書館のこれからを考えよう（3年）」

(2) 単元について

本単元は、「市の様子のうつりかわり」に関わり、広島市こども図書館とその移転問題について考えることを中心に展開できるように開発した。広島市こども図書館は、原爆投下後間もない1949年に全国で先駆け開館した子ども専用の図書館であり、平和祈念・構築のシンボルとして大きな意味をもつ。この広島市こども図書館は、2021年11月に老朽化を原因に「現在地での建替」「広島駅前の商業施設内への移転」を巡って議論が起こった。この問題によって見えてきた図書館の意味や価値を再認識しながら、自然、交通、施設、歴史などの多様な視点、さらにそれらの歴史的変遷をもとに、問題について議論し意見を形成することを目指す単元を構成した。

(3) 指導目標・指導計画

① 指導目標

- 広島市や広島市こども図書館について、時間の経過に伴い移り変わってきたことを理解している。また、地図等の資料で調べ、分かったことをまとめることができる。
- 交通や土地利用、人々の暮らし、自然などの視点やそれらの時期による変化に着目し、広島市こども図書館の発展について考え適切に表現している。
- 単元の学習問題について、自分の意見や学習を振り返ったり見直したりしながら解決し、これからの広島市こども図書館の発展について考えようとしている。

② 指導計画

第一次 広島市こども図書館の移転問題・・・・・・・・・・2

第二次 さまざまな視点で考えよう・・・・6(本時6／6)

第三次 これからのこども図書館を考えよう・・・・・・・・2

(4) 本時の目標

広島市こども図書館の移転問題について、「多様性」の視点をもとに、自分の意思決定を批判的・省察的に捉え直し、判断することができる。

(5) 本時の学習展開

学 習 活 動	指 導 の 意 図 と 手 だ て	評 価 の 観 点
1. 自分たちの意思決定の正当性を振り返る。また、視覚障害者福祉協会の意見を知り、本時の課題を設定する。	<ul style="list-style-type: none"> 自分たちの意思決定と同様に、視覚障害がある人たちの意見の正当性について考える課題を設定し、比較して考えることができるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分の意思決定の正当性について考えている。(発言)
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;"> 視覚障害がある人たちは、どんなことが良いと思って移転した方がいいと言ってきたのか。 </div>		
2. 資料をもとに、視覚障害がある方たちの立場に立って、学習課題について考える。	<ul style="list-style-type: none"> 実際の陳情書をもとに、特に図書館へのアクセシビリティを巡る問題に焦点化する。 視覚障害者福祉協会の方に関わる動画を取り上げることで、視覚障害がある方たちの立場に立ちやすくする。 	<ul style="list-style-type: none"> 視覚障害がある方の立場に立ち学習課題について考えている。(WS)
3. 「多様性」の視点から論争問題について話合う。	<ul style="list-style-type: none"> 「多様性」の視点を取り上げることで、意思決定について批判的・省察的に思考できるようにする。 	
4. 自分たちの意思決定やその過程について振り返る。	<ul style="list-style-type: none"> 学級全体の意思決定の変容について問い、自分たちの意思決定やその過程に目が向くようにする。自分たちが考えてきた「わたしたち」と「多様性」の視点の関係に目が向くようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> 移転問題について、自分の意思決定を批判的・省察的に捉え直して、判断できる(WS)。

4 授業実践の考察

児童は、本時に至るまでに「施設」「交通」「歴史・平和」「土地利用」「市民の願い」など、多様な視点から広島市こども図書館について調べ、移転問題について議論を繰り返してきた。本時は、論争問題を捉える視点、子どもたちには見えづらい視点として、新たに「多様性」を取り上げた。具体的には、広島市視覚障害者福祉協会を始めとする障害者団体の立場である。移転問題についてあまり注目を受けていないが、移転賛成の意見を表明してきたのが彼らである。本時は、彼らの陳情書を資料としながら、視覚障害がある人たちの立場で論争問題について考えた。

本時では、まず視覚障害がある人の意見について資料を通して考えたあと、再び論争問題について話し合った。以下は、その場面の発話記録（一部分）である。多くの児童が「でも」「～だけど」「ちょっと・・・」と自分の意見を見直したり修正したりするような姿が見られている。

<p>C1 私は、前「平和の軸線」にある図書館だったので、壊したらいけないと思って。「やめてよかった」にしていたんですけど、視覚障害の方のほうも考えると交通量も少なくなって便利にいけるようになるので変えました。</p>
<p>C2 でもです。</p>

T もう少し変わったよ、という人の意見を聴いてみようと思います。

C3 僕は、前は「移転をやめてよかった」の黄色のほうだったんだけど。今は「わたし移転をやめてよかった」のオレンジになりました。なぜなら、Kさんとほとんど一緒なんだけど、原爆ドームのほうだったら科学館と図書室だけじゃないですか。科学館は視覚障害の人たちは遊べないから。買い物もないから不便。エールエールのほうだったら、買い物も行けるし、エレベーターも2つもあるから。

C4 わたしたちにとって移転をやめてよかった、の方にして。理由は、視覚障害者の方たちもちょっと不便かもしれないけど。あの、寄付のお金からもできているから、ちよつと……。

C5 たしかに、それを無駄にするのは……

C6 けど、お金をかけるとしても、寄付のお金をかけるとしても。その寄付のお金をアメリカの原子爆弾を落とされたときのころだから、昭和50年ごろだし。そんなに寄付されたお金は使って作ったけど児童図書館も壊された。今のこども図書館には使われていない。

T ねえねえ。ちょっと待って。ここまで3人の人が言った言葉で気になることを拾ったんだけど。たとえば「~だけど」「それもある」「でも」。けっこうさ。これ前回のね。これとこれを見ても分かるように。この人たちどんな気持ち？

C7 迷っている、歴史だったら……。なるほどっていうか。

また、本時では次に自分たちの意思決定の正当性について振り返る場面を設定した。「昨日までのみんな(の考え)」と今日のみんな(の考え)はどこが違いますか」と問い、自分たちの意思決定を意図的に見つけ直すことをねらった。その際、論争問題にある「わたしたちにとって」という言葉に注目させ、図3の板書のように図を基に整理することで、より子どもが自分たちの意思決定を問い直すことができるようにした。しかし、実際の授業では、図のイメージの共有や意味の理解が不十分であったため、結果的に教師が説明してしまう部分が多くなってしまった。例えば、次のような改善を検討している。1つは、「わたしたちって、誰のこと？(今日は?) (昨日までは?)」と問い、「わたしたち」に含めていた範囲を一度明らかにすることである。そして2つ目は、このように「わたしたち」に包摂される(含まれる)人とされない人がいることは、よいか」と判断を求めることである。もう少し踏み込んで発問することで、より自分たちの意思決定の正当性について問い直すことができると考えた。

以下の表は、本時の学習が終了した際に記述させた論争問題に対する自分の意見である。本単元では、児童に論争問題に対する自分の意見を文章で記述させるとともに、その主張の「確かさ」(子どもたちには「自信度」と示した)を5段階の色で表すよう



図3 本時の板書

にした。すると、本時の学習を通して、立場が変わったり、考えに迷いを生じさせたりする姿が見取れた児童は32名中18名であった。また、別の視点で問題について議論し、意思決定させていた前時までの場面と比べても、学級全体として自分の意思決定を見直したり迷ったりする傾向が特に強いことが見取れた。

表 学習後の児童の意見「わたしたちにとって広島駅前の商業施設内への移転をやめたことはよかったか」

わたしたちにとって移転をやめたのはよかった	わたしたちにとって移転をやめたのは、よくなかった
<p>①障害者も大変なのはわかったけど、移転したら平和の図書館なのに、平和じゃなくなる。</p> <p>②障害者にとってはいろいろな意味で移転をした方がいいという事が分かった。だから、自信をなくした。</p> <p>③視覚障害の人には、ぼくたちとちがいが、安心・安全できる場所・にぎやかな場所がいいと思い、移転した方がいいと思っている。</p> <p>④Nさんにとっては駅前がいい。けれど、ぼくたちにとっては今の場所がいい。</p> <p>⑤その人たちにとってだけど、そこも一応電車やバスなどいろいろな交通手段がある。</p> <p>⑥自信がなくなったのはわたしたちだけでいいのかと思ったから。視覚障害者にとってはにぎやかでたくさん音が出る所が安心だけだ。</p>	<p>⑦子どもは科学館が原爆ドームのところにあっていいけれど、障害者には図書館しかない。広島駅は、障害者にとって、買い物やエレベーターがあって便利。だけれど子どもたちにとって遊び・便利がないから。</p> <p>⑧移転をしたらみんなも楽にできるし、障害者にもやさしい。</p> <p>⑨ぼくたちにとっては移転しなくてもいいけど、ある市みんによっては段差があったりするから。広島駅にいった方がいい人もいる。</p> <p>⑩移転をして、障害者の人たちの困っていることを少しでも減らせるようにしたいと思った。</p> <p>⑪障害者のことも考えると、広島駅前のほうがたしかにべんり！でも平和の図書館をこわすのは・・・よくない？</p> <p>⑫たぶん障害者の方は「自分たちも楽しくなりたい」と思ったのかもしれない。わたしだったら、移転してほしい！といっていると思うし、不公平！と思うかもしれない。</p>

一方で、いくつかの課題も残された。1つは、敢えて子どもから遠く、見えづらい立場や視点を取り上げることの難しさである。本單元では、視覚障害のある方の立場で考えるという手立てを取った結果、確かに子どもたちは自分の意思決定を見直す姿が見られた。しかし、子どもたちが「わたしたちにとって」が包摂するものに対する問題にあまり意識が向かなかつたように、子どもたちにとっては、本時の課題に対して切実さが生じていなかったように考える。子どもたちにとっては遠く見えづらい立場や視点であっても、切実さを醸成する指導が必要だと感じた。2つ目は、子どもたちが「自ら問う」「自ら見直す」指導方法の開発・工夫である。本單元では、教師の意図的な教材配列により自分の意思決定に対する批判的・省察的な思考を促したが、子どもが自律的に多様な見方・考え方や問いを働かせる指導が求められる。

(主要参考文献)

- ・飯野由里子・星加良司・西倉実季(2022)『「社会」を扱う新たなモードー「障害の社会モデル」の使い方一』生活書院
- ・金鍾成(2022)「論争問題」『社会科重要用語事典』明治図書